



「幼保小連携だより」

# 育ちと学びをつなぐ

## スタートカリキュラムを編成する上でのポイントとは？

### <小学校学習指導要領 第1章 総則>

スタートカリキュラム等に関する小学校学習指導要領・同解説の記述については、第1章「総則」第2の4「学校段階等間の接続」(1)に示されている通りですが、

第3章「教育課程の編成及び実施」の4「指導計画の作成等にあたって配慮すべき事項」には次のように記されています。

1 各学校においては、次の事項に配慮しながら、学校の創意工夫を生かし、全体として、調和のとれた具体的な指導計画を作成するものとする。

(1)～(3)省略

(4)児童の実態を考慮し、指導の効果を高めるため、合科的・関連的な指導を進めること。

スタートカリキュラムについては、各小学校や児童の実態が異なることから、どのような期間で、どのような方法で実施するのかについては、それぞれの小学校において適切に判断して取り組まれることとなります。そのことを踏まえたうえで、各小学校においては、次の点について配慮したスタートカリキュラムを編成し、実施することが望まれますので、そのポイントを紹介します。

### Point1!

幼稚園、保育所、認定こども園と連携協力すること



幼稚園、保育所、認定こども園と小学校との間で、子どもの実態や指導のあり方などについて、共通理解を深めるとともに幼児期の保育・教育の成果や培ってきた力を積極的に生かせるスタートカリキュラムを園と連携して編成するようにします。

スタートカリキュラムは小学校だけで創るものではなく、「10の姿」をもとに話し合いながら編成するという意識が大切です。

### Point2!

学校全体の取組とすること



小学校入学当初の接続期は、その後の6年間の小学校生活を支える重要な時期という捉えが大切です。ある小学校では、学校教育目標を基に定めた6年間で育成を目指す資質・能力について、まずスタートカリキュラムから育成するという考えを職員で共通理解する等、組織的に取り組み、全職員で研修して学年合同授業や異学年交流に臨んでいます。また、学校地域支援本部や保護者ボランティアの協力を得ることも有効です。

5歳児の終わりの頃の子どもと、入学したばかりの1年生の育ちに大きな差はありません。また、幼稚園や保育所、認定こども園それぞれ特色のある保育・教育を受け、子どもたちの育ちには個人差があることから、一人ひとりの学びの経験を見通したきめ細かい指導が求められます。そこで、園から引き継がれた「幼児指導要録」「児童保育要録」を活用し、子どもの発達や学びの状況に関する情報を共有することが大切です。

保育者は、「10の姿」を手掛かりに、保育における子どもの育ちの姿を、より分かりやすく伝えてくださっています。

子どもにとって分かりやすく学びやすい環境づくりと新しい友達との人間関係づくりを心掛けることで安心でき、幼児期の生活に近い活動と小学校での学び方を織り交ぜながら授業を進めることで、主体的に自己発揮できるようになります。

また、45分の授業時間にとらわれず、20分や15分程度のモジュールで時間割をつくることも大切です。

### Point3!

個々の児童に対応した取組であること



### Point4!

授業時間や学習環境、人間関係づくり等について工夫すること



### Point5!

合科的・関連的な指導の工夫を進め、指導の効果を一層高めること



例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習を中心にして、国語や音楽、図画工作等、他教科等の内容を合科的に扱い、大きな単元を構成することが考えられます。そうすることで、子どもたちがゆっくりとした時間の中で学習したり、自分の思いや願いの実現に向けて、粘り強さを発揮したり、試行錯誤を繰り返したりすることも可能になります。

### Point6!

保護者への適切な説明を行うこと



保護者からの子どもたちへの支援もとても大切です。スタートカリキュラムの意義や、具体的な指導の仕方について、保護者の方々にも事前にわかってもらっていると、何のために、何を目指して小学校での学習を進めているのかが分かり、長い目で子どもたちの育ちを見守っていただけます。

6つのポイントを参考にして、各小学校において準備しているスタートカリキュラムの状況を確認してほしいと思います。

子どもの発達と学びの連続性を長期的な視点でとらえること、そして、スタートカリキュラムの終わりごろに幼保と小とで振り返り、それぞれのカリキュラムを改善していくPDCAサイクルを回していくことも重要です。

